九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

動的家族画テスト（KFD）に見られる母親の描画特徴と心理特性 ： 母子関係アセスメントとしての有効性の検討

高橋，正泰
九州大学大学院人間環境学府

大野，博之
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/913

出版情報：九州大学心理学研究. 4, pp.279-285, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2003, Vol.4, 279-285

動的家族画テスト（KFD）に見られる母親の描画特徴と心理特性
―母子関係アセスメントとしての有効性の検討―

高橋　正泰　九州大学大学院人間環境学府
大野　博之　九州大学大学院人間環境学研究院

The drawing characteristic and state of mind characteristic of the mother that are seen to Kinetic Family Drawing Test（KFD）
―The examination of the efficacy as mother and child relation assessment―

Masayasu Takahashi（*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*）
Hiroyuki Ohno（*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*）

This study investigated the efficacy of Kinetic Family Drawing Test（KFD）as the assessment of mother-child relationship. Therefore, KFD was implemented to the mothers of 2-3 years children who commute in a nursery school. It analyzed it about the state of mind characteristic that is projected to drawing from the view point of mother-child relationship. As a result, the characteristic that the mothers of an unstable group, paints a child smaller in comparison with, the mothers of a stable group. Also, many of the mothers of a stable group were painting the situation that does 1 activity with family everyone, and the height of the interaction nature of the family. However, many of the mothers of an unstable group were painting the situation that without the interaction such as the picture that is lining up and, individual activity. This result was suggest that the state of mind characteristic of the mother is projected to drawing, and that it is effective as the assessment of mother-child relationship, to implement KFD to the mother.

Keywords: Kinetic Family Drawing Test, mother-child relationship, assessment

問題と目的

乳幼児期の母子関係が子どものその後の発達に影響を与えることは多くの研究により示され，その重要性は多くの人々が主張しているところである（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978）。例えば，子どもは発達・成長に伴い，友人関係や周囲の大人との関係など多くの場面で人間関係を形成しなければならない。その際に，乳幼児期に母親と安定した関係を形成した子どもは，対人関係の形成が良好であり（Pastor, 1985），逆に安定した関係を形成できなかった子どもは，他者に対する攻撃的行動などの問題行動が多いことが示されている（Lyons-Ruth, Alpern & Repacholi, 1993）。このような子どもの発達を支える母親の関わりについては多くの研究が行われ，様々な要因が報告されている。

近年では，安定した母子関係の形成に影響を与える要因として，母親のストレス量やソーシャル・サポートの有無（Crockenberg, 1981）が重要であるという報告も多くなされており，母－子関係のみではなくそれを取り巻く環境要因として家族の役割は大きいことが指摘されている（柏木・若松，1994; Shea & Tronick, 1988）。このような研究の多くは，母親のストレスやサポートの有無について質問紙調査を行うことで測定を行っているが，家族内の人間関係を調べる際には，遠藤（1988）が指摘するように，家族という個人的な情報は他人に知られたくないという気持ちやよく見せたいという歪みが生じやすいこと，人間関係を客観的に表現することが困難であるという問題があることを念頭におく必要がある。筆者の臨床現場における経験として，面接での言語報告や質問紙に表された特徴が，実際の子どもや父親に対する関わりとずれが観察されたり，表現しきれていない部分があるのを感じることがしばしばある。そのため，機制や自我防衛の働かない，より無意識的なレベルでの家族に対する意識を測定することによって，母親の捉える家族内の人間関係を捉える試みが必要になってくると思われる。

そのような無意識的なレベルでの家族に対する意識について測定する方法として，「動的家族画テスト」（以後，KFD と記述）の有効性が多くの研究によって示されている（日比，1985; 塩見・橋本，2001; 鈴木，1996）。KFD とは，対象者に「あなたを含めて，あなたの家族の人たちが何かしている」所を描いてもらう方法であり，

描画者の捉える家族内力動が表現されること（日比，1985）が示されている。この方法は，多くの臨床場面で用いられ，有効性が示されてきているが，描画者の多くは学校不適応生徒，心身症児，健常児など児童・青年を対象としたものが多く，母親に対して描画を行った研究は少ない。

母親に対してKFDを施行した先行研究としては黒田・近澤（1995）の研究が挙げられる。黒田ら（1995）は，父親や母親の家族認知について検討するという目的で，社会生活上，人格的に問題を有していない父親・母親にKFDを施行しその描画特徴を調べ，1事例ではあるが，登校拒否児童の父親・母親のKFDにおける特徴と比較を行っている。その結果，臨床的な問題を有している子どもの親の描画特徴に，健常児の親の描画とは異なる特徴が見られることを示し，心理テストとして養育者に対してKFDを行うことの有効性が示されている。しかしながら，黒田ら（1995）の研究においては，父親，母親のKFDにおける描画特徴について検討しているのみであり，家族内の人間関係―例えば，母子関係―と描画特徴の関連についての検討はなされていない。親にKFDを施行した際の描画特徴について，子どもとの関係から検討を加えることにより，KFDがより臨床的に有用な資料となると考えられる。

そのため，本研究においては母親に対してKFDを施行し，母子関係の観点から描画特徴の分析を行う。そのことにより，母親の描く描画特徴の検討，及び描画特徴に投影される母親の心理特性について検討を加え，家族関係のアセスメントとして母親の描くKFDの有効性について検討することを目的に行われた。

方　法

1．調査対象および時期

調査対象は，公立保育園の2歳・3歳児クラスの子ども（平均月齢36.5：範囲24－36）とその母親（平均年齢32.1歳：範囲24－42），計65組であり，調査は，2002年8月下旬に行った。調査対象として，2・3歳児を選んだ理由としては,自己意識やそれに伴う自己主張，自己行動の制御などの能力が発達する時期であり（Kagan, 1981; 柏木，1983），家族の中で主体的な存在としての位置付けがなされる時期であると考えられる。そのため，KFDにおいて動的な活動が描画されやすい時期であると考えたためである。

2．調査内容

1）KFD

KFDの施行は，通常1対1の面接場面で施行するのが望ましいが，保育園で施行したため集団での実施であった。検査は，白の画用紙（A4版）と鉛筆（HB），消しゴムを用意し，以下の教示を与えた後に，描画を施行した。

「これから，この画用紙に，あなたを含めて，あなたの家族の人たちが，何かをしているところの絵を描いてください。漫画や棒のような人ではなく，完全な人を描いてください。家族の人たちが何かしているところを描いてください」。

描画時間は特に設定していなかったが，ほとんどの母親は30分程度の時間で書き上げた。

2）質問紙

描画特徴との関連を見るために母親に対して，愛着行動評価尺度（高橋，2002）を施行した。愛着行動評価尺度は，「気質の困難性」，「円滑な相互交渉」，「他者との関わり」，「甘え／依存」という4つの因子，19項目からなる質問紙であり，日常生活場面での子どもの愛着行動を母親が評価するものである。2歳児・3歳児を対象とした高橋（2002）の研究により，愛着行動評価尺度の得点とアタッチメントQ分類法における愛着安定性得点との間に高い相関が認められることや，尺度得点の高い子どもは保育園で適応行動を多く示し，そのような子どもの母親は適切な養育行動を多く行うことが確認されている。

質問紙は，描画を書いた後に配布し，母親により記入がなされ，質問紙を行うことで描画に影響がでないように配慮した。

3．分　析

本研究に参加した母親を，愛着行動評価尺度の得点に基づき，平均得点より上を高得点群，平均得点より下を低得点群に分類し，KFDにおける描画特徴の比較を行った。各群の特徴はTable 1に示すとおりである。

母親の描画は，先行研究で多く用いられている（日比，1985），①描画順位，②人物の大きさ，③人物の位置，④母親と家族構成員との距離，⑤描画の様式という5つの視点から形式的分析を行った。さらに，本研究においては，内容分析として①描画の主題の有無（ある場合にはその内容），②描画された家族画において家族間に相互作用があるかどうかについて分析を行った。家族間に相互作用があるか否かについての基準は，家族が何か1つの活動に取り組んでいる様子が描かれている場合は相互作用ありに分類した。また，顔や人物が単に並んでいるものは相互作用なしに分類を行ったが，家族全員が手をつないでいるなど何らかの接触を持って並んでいる場合は相互作用ありとして分類した。分類は2名の評定者で行われ，一致しない描画については協議して決定した。

Table 1
群別に見た対象者の人数・年齢・家族構成

	人数	平均年齢		家族の構成：人数			
		子ども	母親	対象児のみ	年上の同胞	年下の同胞	年上・年下の同胞
高群	31	36.9ヶ月	31.0歳	10	15	4	2
低群	34	35.7ヶ月	33.1歳	12	14	4	4

結　果

＜形式的分析について＞

・ **描画順位**

Table 2には，最初に描いた人物が誰であったかについて示している。全体としてみると，父親を最初に描くものと対象児を最初に描くものが多く，この2つで全体の7割近くを占めていた。また，この傾向は高群と低群で比較した場合も同様であり，χ^2検定の結果でも有意な差は認められなかった。Table 3には，最後に描いたものが誰であったかについて示している。全体としては，母親自身を最後に描くものが多く，次に父親，祖父母を描くものが多いという結果であった。群別に見てみると，有意な差は認められなかったが，高群の方が母親自身を最後に描くものが多く，低群の方は父親を最後に描くものが多いという結果であった。

・ **人物の位置**

Table 4には最も高い位置に描かれていた人物について示している。全体としては，父親を最も高い位置に描くものが多く，次に母親を描くものが多かった。群別に見てみると，有意な差は認められなかったが，高群の特徴として，対象児を高い位置に描くものが多かったことが挙げられる。逆に，低群では，対象児が高い位置に描かれる割合は少なく，父親と母親で6割以上の割合を示していた。

Table 5には，最も低い位置に描かれていた人物について示している。全体としては，対象児が描かれる場合が多く，次に年下の同胞を描くものが多かった。群別に見ると，有意な差は認められなかったが，高群では，対象児，母親の順に低い位置に描かれ，低群では，対象児，父親・年上の同胞が低い位置に描かれていることが多かった。

・ **人物の大きさ**

Table 6には，最も大きく描かれていた人物を示している。全体では，父親，母親の順に大きく描かれており，実際の人物の大きさに従った描写が多かった。群別に見ると，有意な差は得られなかったが，高群では，対象児を最も大きく描くものがいたが，低群では対象児を大き

Table 2
最初に描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　親	38.5	38.2	38.7
母　親	7.7	0.0	16.1
対象児	30.8	35.3	25.8
年上の同胞	10.8	11.8	9.7
年下の同胞	1.5	2.9	0.0
祖父母	10.8	11.8	9.7

Table 3
最後に描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　親	15.4	8.8	22.6
母　親	55.4	61.8	48.4
対象児	4.6	2.9	6.5
年上の同胞	4.6	2.9	6.5
年下の同胞	4.6	8.8	0.0
祖父母	15.4	14.7	16.1

Table 4
1番上に描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　親	40.0	38.2	41.9
母　親	18.5	14.7	22.6
対象児	12.3	17.6	6.5
年上の同胞	12.3	11.8	12.9
年下の同胞	0.0	0.0	0.0
祖父母	16.9	17.6	16.1

Table 5
1番下に描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　親	13.8	11.8	16.1
母　親	13.8	20.6	6.5
対象児	41.5	44.1	38.7
年上の同胞	9.2	2.9	16.1
年下の同胞	12.3	11.8	12.9
祖父母	9.2	8.8	9.7

Table 6
1番大きく描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　　親	53.8	47.1	61.3
母　　親	23.1	32.4	12.9
対 象 児	6.2	11.8	0.0
年上の同胞	1.5	0.0	3.2
年下の同胞	0.0	0.0	0.0
祖 父 母	15.4	8.8	22.6

Table 7
1番小さく描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　　親	7.7	11.8	3.2
母　　親	4.6	5.9	3.2
対 象 児	55.4	***38.2*** **	***74.2*** **
年上の同胞	10.8	11.8	9.7
年下の同胞	18.5	***29.4*** *	***6.5*** *
祖 父 母	3.1	2.9	3.2

* p<.05　** p<.01

Table 8
1番近くに描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　　親	17.5	14.7	20.7
対 象 児	52.4	50.0	55.2
年上の同胞	15.9	17.6	13.8
年下の同胞	9.5	14.7	3.4
祖 父 母	4.8	2.9	6.9

Table 9
1番遠くに描いた人物（%）

	全体	高群	低群
父　　親	44.4	44.1	44.8
対 象 児	15.9	11.8	20.7
年上の同胞	12.7	14.7	10.3
年下の同胞	3.2	5.9	0.0
祖 父 母	23.8	23.5	24.1

く描いたものはいなかった。また，低群においては，父親の次に祖父母を大きく描くものが多かったのが特徴的であった。

Table 7には，最も小さく描かれた人物について示している。全体としては，対象児，年下の同胞の順に小さく描かれていた。群別に見ると，χ^2検定で有意な差が認められ（$\chi^2(5) = 12.58$，$p<.05$），残差分析の結果，高群で対象児が最も小さく描かれる割合が低く（$p<.01$），低群では対象児が最も小さく描かれる割合が高い（$P<.01$），高群では年下の同胞が小さく描かれる割合が高く（$p<.05$），低群では年下の同胞が小さく描かれる割合が低い（$p<.05$）ことが示された。

・人物間の距離

Table 8には，描画者である母親と最も近い場所に描かれていた人物を示している。全体としてみると，対象児を近くに描くものの割合が最も高く，次に，年上の同胞，父親という順番であった。群別にみても，その傾向は同様であり，有意な差は認められなかった。

Table 9には，描画者である母親から最も離れたところに描かれていた人物を示している。全体としては，父親が最も遠くに描かれる割合が高く，次に祖父母が遠いという結果であった。群別にみても，その傾向は同様であり，有意な差は認められなかった。

・描画の様式について

描画の様式や特徴についても分析を行ったが，折り紙区分が，高群で1名，低群で3名，区分が低群で2名みられたのみであり，多くの描画の様式は一般様式であった。また，人物の省略については，高群の描画にはみられず，低群において3名認められた。低群における3名の省略された人物は，1名が子どもを省略，2名が母親自身を省略して描いていた。

＜内容分析について＞

・主題の有無

Table10には，描画における主題の有無について示している。描画における活動がはっきり示されているもの，描画者から何をしているのか報告があったものを主題有，描画者から主題に関する報告が無かったものや，単に人物が並んでいる描画は主題無に分類された。

全体を見ると，多くのものがある主題に基づいて描画を行っていることが示されている。群別にみても，同様の結果であり，有意な差は認められなかった。

次に，主題としてどのような活動が選ばれていたかという点について検討を加える為に，主題有に分類された描画の主題を示したものがTable11である。このTableをみると，約半数の母親は描画に主題として「食事場面」を選択していることが分かる。次に多かったのは，「公園で遊んでいる様子」，例えば，ブランコで遊ぶ様子や

Table 10
主題の有無（%）

	全体	高群	低群
有	75.4	76.5	74.2
無	24.6	23.5	25.8

Table 11
主題の内容

主題の内容	比率
皆で食事をしている	44.9
公園での遊び(ブランコ，滑り台など)	12.2
花火をしている	6.1
トランプ・かるたなどの遊び	6.1
テレビを見ている	4.1
お風呂に入っている	4.1
海水浴に行っている	4.1
釣りに行っている	4.1
買い物に行っている	2.0
畑仕事をしている	2.0
虫取りをしている	2.0
テニスをしている	2.0
歯磨きをしている	2.0
ペットと遊んでいる	2.0
ドライブのお見送り	2.0

Table 12
相互作用の有無（%）

	全体	高群	低群
有	63.1	***82.4*** **	***41.9*** **
無	36.9	***17.6*** **	***58.1*** **

*p<.05,　**p<.01

サッカーをする様子などであった。「花火」，「海水浴」などは実施時期が夏であったことから選ばれた主題であったと考えられる。

・家族の相互作用性

Table12に示しているのは，描画に見られる家族の相互作用性の有無である。全体としてみると，6割以上の母親が家族描画を行う際に相互作用性を持たせて描いていることが示されている。群別に見ると，χ^2検定の結果，有意な差が認められ（$\chi^2(1) = 9.80$，$p<.01$），残差分析の結果，高群において相互作用性有の割合が高く（$p<.01$），相互作用性無の割合が低い（$p<.01$）ことが示された。また，低群においては，相互作用性有の割合が

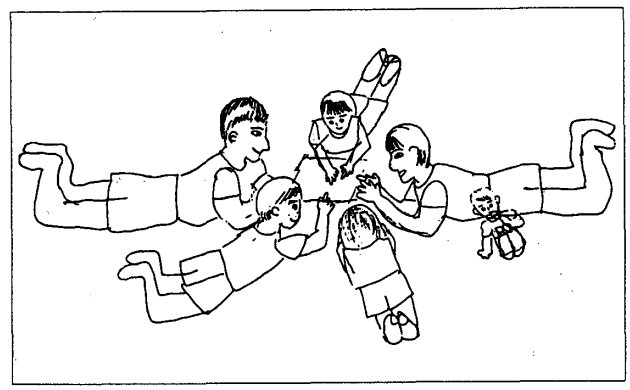

Fig. 1　高群の母親の描画（相互作用性）

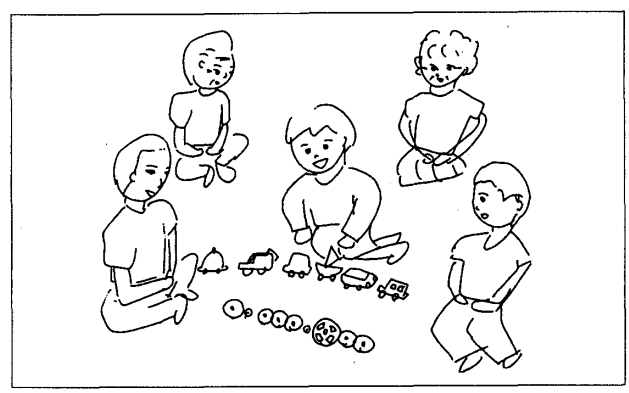

Fig. 2　高群の母親の描画（人物間の距離）

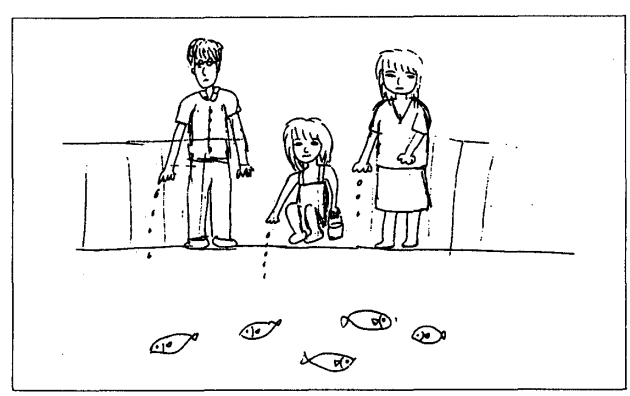

Fig. 3　低群の母親の描画（人物並列・相互作用性低）

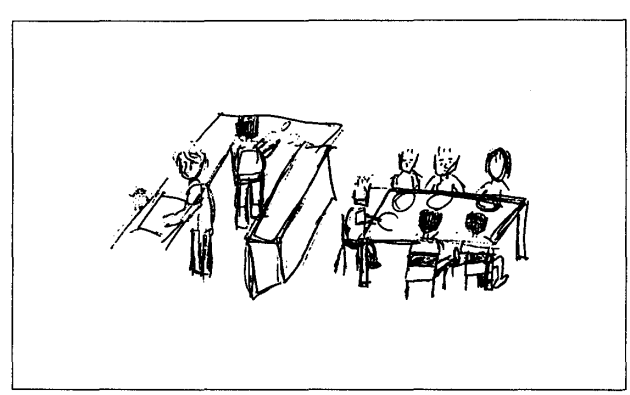

Fig. 4　低群の母親の描画（区分・相互作用性低）

低く(p<.01)，相互作用性無の割合が高い(p<.01)ということが示された。

考　察

本研究においては，母親に対してKFDと愛着行動評価尺度を施行し，母子の関係性が描画に反映されるのか否かについて検討するとともに，描画に見られる母親の心的特性について検討を加えることが目的であった。そのため，考察では母親全体の描画特徴について先行研究の結果と比較するとともに，母子の関係性からみた描画特徴とその心理的特徴について考察を加えることとする。

1．母親の描画特徴

母親の描いたKFDについて形式的な分析を行った結果，描画順位と人物の距離において母親を対象にKFDを施行した黒田ら（1995）の研究とは異なる結果が得られている。黒田ら（1995）の研究では，母親の描画順位の特徴として半数以上のものが父親を最初に描くことが示されている。本研究においても，最初に描かれる割合が最も高かったのは父親であったが（Table 2），先行研究と比較してその割合は低く，対象児を最初に描く割合が高いという結果が得られている。描画順位は，描画者の自分の家族への認知的構えを示すものであり，かつ相当に意識的水準におけるものであると予想される（日比，1985）ことを考えると，父親を最初に描くということは，家庭内における父親の役割（家長）が大きく反映した結果であると考えられる。本研究において，対象児の割合が高いという結果が得られたのは，子育ての最中にある母親の子どもへの関心の高さを示すものであり，育児期にある家庭において子どもの存在が大きいことを伺わせるものであった。

また，人物間の距離は家族間の親密性や当該人物との心理的距離を投影しているものであると考えられる（日比，1985)。黒田ら（1995）の研究においては，誰よりも父親像を自分に近づけて描く傾向が見られている。しかしながら，本研究においては父親を自分に近づけて描く割合は低く，対象児を近くに描くものの割合が半数を超えていた。また，4割以上の母親が父親を最も遠くに描いていた。対象児を最も近くに描くという特徴は，描画順位と同様に子どもに対する関心や親密性を示していると思われる。また，同胞ではなく対象児が最も近くに描かれていたという結果は，対象児の年齢が2歳・3歳で，家族という枠組みの中に主体的に加わり始めた時期である為に関心が高くなったのではないかと考えられる。しかしながら，調査を依頼した場所が対象児の通う保育園であったために，対象児が特別に意識されていた可能性もあり，子どもの年齢や活動性により家族描画にどのような違いが見られるかという点については今後の更なる検討が必要である。さらに，父親が最も遠くに描かれていたという点については，Fig.2に示すように，母親の描画特徴として，母親と父親で子どもを囲むように描かれている描画が多いためであると考えられ，必ずしも心理的に距離があることを示すものではないと考えられ，逆に子どもを守るように母親から最も遠いところに描かれた父親は育児を共に行っていく存在として描かれているようであった。

2．母子関係からみた描画特徴

次に，母子の関係性という視点から描画特徴を見てみると，愛着行動評定尺度の得点の違いにより描画特徴にいくつかの相違が認められた。この点について考察を加えることとする。

KFDの形式分析において，高群と低群の間で描画特徴に有意な差が認められたのは，人物の大きさであり，低群の母親は対象児を最も小さく描くという特徴が見られた（Table 7）。

KFDにみられる人物の大きさは，当該人物に対する興味や関心を示すものであり，描画者の肯定的・否定的な態度が投影するとされている（日比，1985; 高橋・高橋，1991; 寺嶋・足利・宮島・澤村・田中，1996)。Table 1に示すように，低群は高群よりも，同胞がいない人数や，年下の同胞が少ないため，人物を実際の大きさに描いたため，最も小さく描かれた可能性は否めない。しかしながら，その差はわずかであり，7割以上の母親が対象児を小さく描いているという特徴は心理的な特性を反映したものであると考えられる。人物を小さく描くという否定的な感情を描画で示す一方で，Table 8に示されているように，低群の母親は高群よりも高い割合で自分の近くに対象児を描いており，対象児への親密性が示されていると思われる描画特徴もある。母子関係に関する先行研究で安定した母子関係を形成できない母子の特徴としてアンビバレントな感情を抱きやすい（Egeland & Farber, 1984）ことを示した研究がある。本研究において，母子関係の評価に用いた愛着行動評価尺度は，子どもの示す愛着行動から母子関係を評価するという方法であり，得点の低いものは，円滑な母子相互交渉を妨げるような行動特徴を多く行うことが示されている（高橋，2002)。したがって，低群の母親に認められた対象児を最も小さく描くという特徴は，子どもに対して親密な感情は抱いているが，うまく関われないという母親の心的な状態を反映した結果であると考えられる。

また，内容的な分析の結果をみると，主題に関しての相違は見られないが，描画に見られる家族の相互作用性については高群と低群において大きな相違が認められた。Table12に示されるように，高群の母親の多くは相互作用性のある描画を行っているが（Fig.1)，低群の母親の

多くは家族が単に並んでいる絵（Fig.3）や同じ場面ではあるが個々に活動をしている絵（Fig.4）が多く,相互作用性は認められないものが多かった。KFDは，「家族が何かしているところ」という運動が付加されることによって，家庭内コミュニケーションなど，家族の特殊な力動性の表現をねらい，家族の相互作用がより増幅されて表出することを期待されている（日比，1985; 江幡ら，2000）。その意味において，本研究の結果は相互作用性の分析が重要であることを示したと思われる。特に，本研究においては母子関係に焦点を当て描画特徴の分析を行ったが，母子関係を形成するために最も重要な要因である母親との相互作用や家族内の相互作用（Ainsworth, et al., 1978）が，母親の描画に投影されており，KFDは家族の相互作用に関する多くの情報をもたらしてくれる方法であるといえる。

まとめと今後の課題

KFDは，学校不適応生徒（塩見ら，2001），心身症児（鈴木，1996）などを対象に多くの臨床場面で用いられ，その心理テストとしての有用性が確認されている。本研究においては，母親に対してKFDを施行し，母子関係の視点から，描画特徴やその心的特性について検討を加えた。その結果，母親の描画には子どもやその他の家族成員に対する認知や心理的特徴が投影されていると考えられ，KFDを用いることで，子どもに対する母親の認知や家族の相互作用性や凝集性といった側面を評価することが可能であることが示唆され，母親に対してKFDを施行することの有効性が示された。

今後の課題としては，より多くの母親に対してKFDを施行することで，描画特徴や分析方法に関する検討を加えていくことや，面接やその他の尺度を組み合わせ，多角的な描画の評価を行うことで，臨床的により有用な方法としていくことが挙げられる。

文　献

Ainsworth, M. D., Blehar, M. D., Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale*, NJ: Erbaum.

Crockenberg, S. B. (1981). Infant irritability, mother responsiveness, and social support influences on the security of infant-mother attachment. *Child Development*, **52**, 857-865.

江幡綾子・吉田昭久．(2000)．子どもの絵に見られる家庭内コミュニケーションの実態と心理的課題―動的家族画テスト（KFD）を通して―．*茨城大学教育学部紀要*, **49**, 95-115.

Egeland,W. L. & Farber, E. A. (1984). Infant-mother attachment : Factors related to its development and change over time. *Child Development*, **55**, 753-771.

遠藤辰雄．(1988)．『家族画ガイドブック』，矯正協会．

日比裕泰．(1986)．動的家族描画法（K－F－D）―家族画による人格理解―．ナカニシヤ出版．

Kagan, J. (1981). *The second year*. Harvard University Press.

柏木恵子．(1983)．子どもの「自己」の発達．東京大学出版会．

柏木恵子・若松泰子．(1994)．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み．*発達心理学研究*, **5**, 72-83.

黒田健次・近澤真由．(1995)．動的家族描画法（K－F－D）による親の家族認知に関する研究．*応用教育心理学研究*, **11**, 18-24.

Lyons-Ruth, K., Alpern, L. & Repacholi, B. (1993). Disorganized infant attachment classification and maternal psychosocial problems as predictors of hostile-aggressive behavior in preschool classroom. *Child Development*, **64**, 572-585.

Pastor, D. L. (1981). The quality of mother-infant attachment and its relationship to toddler' s initial sociability with peers. *Developmental Psychology*, **17**, 326-335.

Shea, E. & Tronick, E. Z. (1988). The maternal self-report inventory : A research and clinical instrument for assessing maternal self-esteem. In H. E. Fitzgelald, B. M. Lester, & M. E. Yogman (Eds.), *Theory and research in behavioral pediatrics : Vol.4 (pp.101-139)*. New York : Prenum.

塩見邦雄・橋本秀美．(2001)．学校不適応生徒の心理アセスメント―心理アセスメントの適用と効果について―．*兵庫教育大学研究紀要*, **21**, 87-97.

鈴木一華．(1996)．家族描画テスト法による心身症児の鑑別基準作成―カイ２乗検定を用いて―．*早稲田心理学年報*, **29**, 59-67.

高橋雅春・高橋依子．(1991)．『人物画テスト』．文教出版．

高橋正泰．(2002)．母子関係の心理アセスメント―愛着行動に関する検討―．*心理リハビリテーション心理学研究*, **30**, 15-29.

寺嶋繁典・足利　学・宮島千鶴・澤村律子・田中英高．(1996)．家族画テストにおける一般児童の特徴．*関西大学『社会学部紀要』*, **28**, 81-109.